日野鼎哉と越前への種痘の普及　　資料３：

●日野鼎哉（1797－1850）

九州の豊後の国生まれ。若い頃儒者で蘭学者である帆足万里（1778－1852）の元で蘭学を学ぶ。この頃は まだオランダ語辞書や文法書もまだない時代。1820 年代の初めに長崎に遊学し、文政六年六月（1823 年 8 月）にシーボルトが長崎にやってきた当時長崎に居て、シーボルトが開いた鳴滝塾の最初の塾生の一人となる。文政十二年（1829 年）九月のシーボルトの国外追放のあともなお長崎に残って勉学を続ける。天保四年（1833 年）日野は、蘭学の大家小石玄瑞の後援を得て京都に移り住み、医院を開業するとともに蘭方医学を学ぶ塾を設立（アン・ジャネッタ著『種痘伝来』2013 年岩波書店による）。

●越前府中における種痘の普及

越前に種痘を普及させた立役者：福井の町医者・笠原良策（1809－1880）。農家から医者となり福井藩の漢方医師となった笠原竜斎の子。彼の種痘普及事業は、師匠である日野鼎哉との合作。

1849 年 11 月 3 日（嘉永二年九月十九日）に長崎から京都の日野の元に届いた牛痘の痘痂の一つが見事に発症し、この苗は次々と受け継がれて京大坂の多くの小児に接種。1849 年 12 月 30 日（嘉永二年十一月十六日）と 1850 年 1 月 2 日（嘉永二年十一月十九日）の両日に二人の小児に種痘を行った笠原は一路雪の中を福井に向い、途中一人の小児の腕の痘を福井から連れてきた一人の小児に継ぐことで、この二人の種は無事福井の町に届けられ、1850 年 1 月 8 日（嘉永二年十一月二十五日）に福井の笠原の自宅の隣に設けられた仮種痘所において、もう一人の京都の小児の痘が福井の小児に接種。これが越前での最初の種痘であり、越前への種痘普及の始まり 。

この事業に越前府中で協力した医師：齋藤策順（1822―1858）・渡辺静庵（1808－80）と生駒耕雲（1808－80）の 3 医師。彼らは日野の弟子　齋藤：本多家医師、渡辺・生駒：府中町医師。

この事業には、計画段階から府中の 3 医師が参画。彼らは笠原が福井に向う途中の 1850 年 1 月 7 日（嘉永二年十一月二十四日）に種継ぎのための小児 3 人を伴って越前府中の宿に出迎え。そして日を改めて 1850 年 1 月 17 日（嘉永二年十二月五日）。3 医師の一人渡辺静庵が 3 人の府中の小児をつれて福井の仮種痘所を訪ね、笠原らの手によって 3 人に種痘実施。この 3 人の種が府中に持ち帰られ、府中の町に設けられた仮種痘所において、他の府中の小児たちに次々と接種 。

府中における最初の仮種痘所：商家平吹屋庄三郎の家。最初に種痘を行った小児は、渡辺静庵の実子の富江と孝一郎、そして熊谷某の息子。この府中仮種痘所の運営には、領主本多家から年 20 俵ほどの費用が下賜。領主本多家から、仮種痘所で行われている手法以外の方法で種痘を行ってはならないとのお達しが出される。嘉永四年・六年と続けて本多家より、いまだ種痘を受けていない小児の生死の別を書面にして届け出よとの命令が出され、1855 年 11 月 26 日（安政二年十月十七日）にはこれ以前の布告が再確認されるとともに、近年此の布告が軽視されていることへの警告と、新たに公設の除痘館を設け、今後はここで種痘を行うので、除痘館から呼び出しがあった際にはかならず種痘を受けるように領内に布告された 。嘉永五年（1852 年）冬の天然痘の大流行に際して、福井ではすでに牛痘種痘を受けた小児は一人も罹らなかった事実を背景にして、爆発的に除痘館に人々が殺到したと伝えられているように、府中でも以後急速に種痘が広まり、これを背景にして、安政二年十月以後は、公設の除痘館となって広く種痘が行われるようになった 。（笠原良策の日記『戦兢録』（福井市立郷土歴史博物館史料叢書 6・1989 年刊）と笠原良策の記録『白神記―白神用往来留』（福井県医師会編・1997 年刊）、『武生医師会誌」1967 年』による）。